

大野修嗣(おおのしゅうじ)先生のプロフィール

1947年生まれ。明治薬科大学、埼玉医科大学卒業。

1990年～91年 中国山西省太原市、山西省人民医院中医科留学。
埼玉医科大学第2内科講師を経て、1996年大野クリニック院長に就任。
現在、埼玉医科大学第2内科非常勤講師、国際東洋医学会 理事。
日本大学医学部非常勤講師。

専門分野は内科(内科学会認定医)、リウマチ(リウマチ学会認定医、登録医、評議員)、アレルギー(アレルギー学会専門医、評議員)。

◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

21歳の頃、強い家族性負荷のもと痛風の発作に罹患。
右足関節の発赤、疼痛、腫脹に対して、越婢加朮湯を煎じて服用。
2服用した後、炎症所見が次第に回復。3腹服用すると右足関節が冷えて痛み出した。炬燵で温めていた記憶があります。



◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

リウマチ・膠原病を専門としています。関節リウマチ症例約300例の治療では、その30%の方が漢方薬のみの治療中にてコントロールされています。
膠原病、とくにSLEではその40%強の症例が5年以上漢方薬のみの治療で活動性がコントロールされています。

◆普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

おおよその数字ですが、埼玉医科大学東洋医学外来では、9割が漢方薬治療です。
大野クリニックでは3割が漢方薬のみの治療、4割が漢方薬と西洋薬の併用、3割が西洋薬のみの治療となっています。



◆10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

漢方は世界に冠たる人間中心の医学理念と人体にやさしい治療マニュアルを有しています。
漢方医学の理念が西洋医に浸透していくに従って、病気診断システムは西洋医学、治療理念は漢方医学の理念がその機軸となって欲しいと感じています。

◆先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なさったことがありますか

実家が江戸時代からの古めかしい薬局であったために漢方薬には事欠かず、時に応じて生薬を薬研で細切して煎じて飲んでいました。

最近では、風邪をひきそうときの葛根湯、風邪をこじらせたときの柴葛解肌湯など、たまにお世話になるくらいです。

◆これから漢方医を志す方に一言お願いします

漢方薬は、処方者が思っている以上にダイナミックに人体に作用しているという信念を持つことです。

作用が感じられなければまだまだ未熟と考えていただきたい。
漢方のこつは書物の中には書いてありません。医療の現場にこそその師匠がいます。

◆漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

漢方薬は魔法の薬ではありません。

特効薬を探すことは不適切な治療に身を曝すことにつながります。
かといって西洋薬と同じように作用する代替薬でもありません。

漢方治療をお受けになるときは、正確な漢方医学的診断を受けていただくことが重要です。



◆座右の銘、お好きな言葉などありましたら教えてください

天の時、地の利、人の和



注意：先生へのインタビューは、当会が2003年4月に行った内容です。